

魂のゆくえ

谷 川 泰 教

(高野山大学)

はじめに

今年度学術大会の趣旨説明の冒頭に、「今日では非科学的として、敢えて取り扱うことを忌避している感のある「靈魂」の問題ですが」とあるように、これは扱いにくいテーマである。考えられる理由として、一つは、科学的思考法がものの見方考え方のベースにある現代人にはなじまないこと、二つには、使われる言葉のニュアンスが人により微妙にあるいは大きく揺れ動くこと、三つには、死を連想させるにもかかわらず、現代社会では死そのものが隠蔽されていて語り合う機会がないことなど、いろいろ挙げることが出来る。そして何よりも、オカルト的な雰囲気を引きずるようなテーマを、たとえ日頃まじめに考えていたにしても、学問的に扱うには勇気がいることがあげられる。

本論では、靈魂の問題を、あの世と生まれ変わる生き物の問題とセットにして、しかも資料を古代インドのジャイナ教と仏教に共通する伝承に限定して、かれらに対する唯物論者からの批判を通して見てみたい。その場合、日本語の靈魂や魂という言葉が適切かどうかの判断を保留して、ジークヴァとアートルマンをそのまま使用する。

唯物論の代表者は六師外道のアジタ・ケーサカンパリンである。インド哲学では一般にはローカーヤタで知られる。

かれらによれば、直接知覚できるものしか存在しない、したがって、知覚できない靈魂に相当するジューヴァやアートマンは存在しない、ただ身体があるのみである、ジューヴァとは身体にほかならない、ということになる。それをジャイナ教徒は「タツジューヴァ・タツチャリラー・ヴァーダ」として伝えている。他には「デーハ・アートマ・ヴァーダ」とも言われる。即ち「身体即我」論である。

この強力な世間的経験知の抵抗に対して、いかにして、靈魂あるいはそれに類したものの存在、あの世の存在、善悪業の果報を受け入れさせるか。ジャイナ教と仏教は共通の素材に取材した対論の記録「バエーシ物語」と『パーヤーシ経』を残しているのです、それを通して、本学会のテーマに近づきたい。

一 魂のゆくえ——ジャイナ教と仏教

ジャイナ教聖典『アーヤーランガ』第一篇冒頭は次のように始まる。

わたしは、かの世尊によってつぎのように説かれたのを聞いた。

この世において、ある人々には、つぎのような想いがない。即ち、わたしは、東方から来たのか、南方から……西方から……北方から……上方から……下方から……あるいは四方の何れから来たのか、と。同じように、ある人々には、つぎのことともわからない。即ち、わたしに生まれ変わるアートマンは存在するのか、わたしに生まれ変わるアートマンは存在しないのか、わたしは何であったのか、あるいはわたしはこの世から死没し、ここで死んで後、何になるのか、と。⁽¹⁾

その根本的な疑問に対して、自分自身で考え、あるいは他の人たちに直接聴いて、こう理解する。わたしは東方か

ら来た、乃至、あるいは四方の何れから、あるいは八方の何れから来たのである、と。同じように、ある人々には、つぎのこともわかったことになる。わたしには生まれ変わるアトマンが存在する。この方位あるいは中間方位から経巡って来て、あらゆる方位へ経巡り続ける、それがわたしだ、と。この文章は、ジャイナ教が輪廻と輪廻する主体とを教学の中心におくことを明示するものである。そしてこれは、ジャイナ教にとどまらず、ヴェーダはもとより、仏教にも共通して流れる、根元的なテーマである。

それをジャイナ教が別の形で表明したのが次の喩えである。表面を粘土で塗り固めた瓢箪を水中に沈めると、粘土がはがれ落ちて、瓢箪が浮かび上がる。粘土は八種業からなる身体であり、瓢箪は⁽²⁾靈魂を表す。

それに対応する仏教の比喩は次のようである。長い間信仰に満ち、戒と聴聞と喜捨に満ちた人の心は、上昇し、勝れたところに行く。例えば、人がギーや胡麻油を入れた壺を深い池の中に沈めると、壊れるであろう。そして壺のかけらは沈んでしまうが、ギーや油は上昇していく。⁽³⁾

この二つのたとえから言えることは、いずれも上昇性を認めるものの、ジャイナ教では、瓢箪に象徴される何らかの具体的ななかたちで靈魂を表すのに対し、仏教では、ギーとか油というように、具体的ななかたちにはなりにくい、しかし何かしら確かに存在するものがあるとして輪廻の主体を示唆するということである。

おそらく、現代人の靈魂／魂観もこの間で揺れ動くものと考えられる。各種統計からはバエーシ／バーヤーシ王に共鳴する人たちが多いのも事実であるが、これが、日常意識とは異なる、死という危機的状況のもとで、差し迫った問題として意識される事柄であることを思うと、数字の扱いには注意を要する。

二 「パエーシ物語」

「パエーシ物語」はジャイナ教聖典『ラーヤパセーナイヤ』に含まれる物語のひとつである。⁽⁴⁾内容としては、セーヤヴィヤの王であるパエーシが死後日光天に日光神として生まれるに至った理由をジャイナ教の立場から説明するものであるが、パエーシと対論するのはニガンタ派の第二十三祖パーサの系統のケーシー・クマール・サマナである。二人の対論を承けて、マハーヴィーラが弟子のゴーヤマに、パエーシ王の死、日光神としての生まれ変わり、再び人間として下生後の出家・解脱成就を物語る。

さて、パエーシは「ジーヴァと身体は同じだ。ジーヴァと身体は別異ではない」と言う代々受け継がれてきた考えに基づいて、沙門ニガンタたちの考え・主張・信念・規範である「ジーヴァと身体は異なる。ジーヴァと身体は同じではない」ということを、様々な比喻を交えて、問いつめていく。ここに仏教の伝承との共通性が認められる。

以下、対論の詳細を紹介することは紙幅の関係上できないので、省略して示す。

〈問答一〉悪業の結果地獄に落ちた祖父（以下Pはパエーシ、Kはケーシを表す）

P…わたしの祖父はこの町にいて、宗教的でもなく倫理的でもなかった。あなたのお説によれば、たくさん悪業を積み、死後地獄に生まれた。わたしは祖父の孫で、よくかわいがられた。その祖父がわたしの許に帰ってきて、「孫よ、わたしはおまえの祖父だ。この町に住んで、非宗教的で、……死後地獄に生まれた。孫よ、非宗教的になるな。悪業を積んで、死後地獄に生まれないように」と、言うのであれば、わたしは「ジーヴァと身体は異なる云々」を信じましょう。しかし、祖父がわたしの許に帰ってきてそのようにいうことはないので、ジーヴァと身体は同じで

あるというわたしの主張はびくともしない。

K… 妃の不倫相手の処罰のたとえ。地獄の新参者はすぐには帰って来れない四つの理由

〈問答二〉善業の結果天界に生まれた祖母（詳細は省略）。

〈問答三〉ジューヴァの存在証明（一）

P… わたしは建物の外で、大勢の物々しい見張り達と共にとり囲んでいる。そこに警備の者たちが、泥棒を縛って連れて来る。私はその男を生きたまま鉄の壺に入れ、鉄の見張りで見張りし、固めてから、忠実な家来に警護させる。しばらくしてから私はその場所にやってきて鉄の壺を開けさせ、あのジューヴァが中から外に出るような、穴や亀裂や隙間がないか、自ら確かめる。もし、この鉄の壺にジューヴァが中から外へ出る穴や亀裂や隙間があれば、わたしは、ジューヴァと身体は異なる、ジューヴァと身体は同じではないということを信じる。しかし、穴や亀裂や隙間はないので、わたしの主張は……

K… 屋上の密閉した部屋がある。そこに一人の人が太鼓と棒を持って入り、音が漏れないように完全に密閉する。真ん中に立って、太鼓を棒でたたいて大きな音を出すとしよう。その時音は中から外へ漏れ出るか。漏れ出る。その部屋に音が外に出る穴や亀裂や隙間はあったか。ない。それと同様に、ジューヴァは進行が妨げられず、地を通過し、岩を通過し、山を通過して、中から外へと出るのだ。ゆえに、ジューヴァと身体は異なると信じなさい。

〈問答四〉ジューヴァの存在証明（二）

P… 問答3と同じ設定で、泥棒を殺して、鉄の壺の中に入れ、密閉し、忠実な家来に警護させる。後でその壺を開かせると、鉄の壺がまるでウジ虫の壺になっているのを見る。この鉄の壺には、外部から諸々のジューヴァがはい

ような、穴などはない。もし、鉄の壺に外部からはい入るような穴などがあるのであれば、わたしはジーヴァと身体は異なる云々を信じよう。しかし、穴などはないから、……

K… その鉄は先に鑄造されたものか。その通り。鉄が鑄造されたのであれば、全体が火によって変化したものであるか。その通り。その鉄には炎が外部から中に入る穴などはあったか。ない。それと同じく、ジーヴァは進行が妨げられず、地を通過し、石を通過し、山を通過して、外部から入るのである。ゆえに信じなさい。……

〈問答五〉〈問答六〉省略

〈問答七〉ジーヴァに重さはあるか

P… 町の警備人が盗賊を連れてくる。わたしはその男を生きのまま計量させ、その後皮膚もはがずに殺させ、そして死体を計量する。その人は、生きのまま量ったときと、死んでから量ったときとで、違いはなく、増えたり、減ったり、軽くなったり、重くなったりはしない。もし、その人が生きているときと死んだときとで、その計量に変化があるのであれば、わたしは信じます。しかし、その人には変化はない。だから、……

K… 例えば、革袋がある。その革袋を空気が一杯のときと入っていないときとで量ると、違いがあるか。ない。それと同じく、ジーヴァには軽重がないので、生きているときと死んでからとで、計量に変化はない。ゆえに、信じなさい。

〈問答八〉ジーヴァの存在証明

P… 例えば、盗賊をあらゆる角度から眺め回しても、そこにはジーヴァを見出さない。二分割して、あらゆる角度から眺め回しても、三分割しても、四分割しても、それ以上に分割しても、そこにはジーヴァを見出さない。もし、

そのようにしてジューヴァを見出すのであれば、わたしは信じます。しかし、わたしはその分割したものにジューヴァを見出さない。だから、……

K… お前は愚か者だ。頭が空っぽだ。例えば、一人の男が、森の中の周囲に誰も住んでいないところで、調理用の大事な火を消してしまったために、火をつけようと、薪の側に来て、薪をあらゆる角度から眺めても、そこには火を見出さない。薪を二分してあらゆる角度から眺めても、火は見えない。三分、四分……。男は薪の中に火を見出せないために落ち込んでしまう。

〈問答九〉ジューヴァの存在証明

P… 手の中のアームラ果のように、身体からジューヴァを取りだして見せて頂けますか。

《その時、王の傍で風が起こり、草木が揺れた》

K… 草木が揺れているの見えるか。見えます。草木を揺らしているのは神、阿修羅・龍……ガンダヴァか、わかるか。わかります。揺らしているのは神でも、阿修羅……でもありません。風が揺らしています。形があり、欲があり、愛があり、無知があり、性があり、レーサーがある、この風の形が見えるか。見えます。もし、あなたにこの風の形が見えないのであれば、どうして手の中のアームラ果のように、ジューヴァを見せることが出来ようか。

このように、覚っていない人が完全に知見出来ない十種の事柄がある。

①ダルマ、②アダルマ、③虚空、④身体とは別のジューヴァ、⑤極微としての物質（ブドガラ）、⑥声、⑦香、⑧風、

⑨この人がジナになるかならないか、⑩この人がすべての苦を滅するか否か。

この十種は、ジナのみが完全に知見する。だから、あなたはジューヴァと身体は異なる云々を信じなさい。

〈問答十〉ジューヴァの平等性

P… 象と蟻のジューヴァは等しいのですか。等しい。象より蟻の方が行為や活動、摂取するもの排泄するものは少ないのではないですか。逆に、象の方が蟻より大きいのではないですか。

K… その通り。象より蟻の方が行為は少ない。蟻より象の方が行為は大きい。ではなぜ象と蟻のジューヴァは等しいのか。例えば、密閉した部屋に、人が灯明を持って入り、中で灯明を灯す。その灯明は部屋の内部を照らす、外は照らさない。つぎにその人が灯明を籠で覆うと、灯明は籠の内部を照らし、籠の外も、部屋の外も照らさない。このように、ジューヴァは過去の業に縛られた身体に入り、それを大小問わず、無数のジューヴァの微点でもって心あるものにする。ゆえに信じなさい。

三 『バーヤシ経』⁽⁵⁾（長部第二十三）

説法に優れた仏弟子のクマーラ・カッサパとバーヤシ王との対話。仏陀みずからの説法ではなく、弟子の説法であるところにも注意が必要である。対話の主題はつぎの三点、①あの世の存在、②生まれ変わる生き物の存在の有無、③善悪の行為の果報の有無である。注意すべきは、この三点は一体のものであるということである。⁽⁶⁾なお、ここではジャイナ教のようなジューヴァの存在を証明することはしない。あくまでも、バーヤシ王の喩えが成立しないことを、別の喩えによって示すだけである。

〈問答一〉

P… わたしの親類縁者で、戒に悉く反する行為をして、今や死の間近にあるものに向かって、わたしはこう言い

ます。「沙門・バラモンたちには、戒に悉く反する行為をしたものは死後地獄に生まれ変わると言うものがある。それが正しければ、君たちは必ず地獄に生まれるはずだから、地獄に生まれたら、わたしのもとに帰ってきて報告して欲しい。」確かにあの世は存在する。生まれ変わる生き物はいる。善悪業の果報はある」と。君たちはわたしが信頼をおく者たちだ。君たちが目にしたことはわたしが目にしたことも同じだから。」かれらはわかったと返事はしても、帰ってきて報告しません。

K… 盗賊の処刑前の猶予を認めるか否かの譬喩。

〈問答二〉省略

〈問答三〉

P… 持戒者で三十三天に生まれた変わったものはいない。

K… 三十三天の時間が地上とは違う、生まれつき目の見えない人にはいろんな色があることがわからないという譬喩。

あの世は肉眼では見られない。沙門・バラモンは、修行に励んで得た天眼によってこの世、あの世、生まれ変わる生き物を見る。

〈問答四〉

P… 沙門・バラモンは、死後もつとよいものがあると知れば、自ら死を選ぶであろうが、かれらはそういうことを知らないで、自殺することはない。

K… 沙門・バラモンは、未熟のものを熟させることはしない。熟すのを待つものだ。かれらはこの世に長く留ま

れば留まるほど、多くの功德を産み出し、人々の役に立つ。

〈問答五〉ジューヴァの存在証明（一）

P… 盗賊の処罰…男を生きのまま釜に入れ、蓋をしてしっかりと幾重にも密閉し、竈に載せて火を焚く。死んだ頃に釜を降ろして口を開き、その男のジューヴァが出て行くのを見ようと、見守っていたが見えない。

K… あなたが大勢の女性たちに囲まれて昼寝をして、夢を見たとき、彼女たちはあなたのジューヴァの出入りが見えますか。生きている人に、生きているあなたのジューヴァが見えないのに、死んだ人のジューヴァが見えますか。

〈問答六〉ジューヴァの存在証明（二）

P… 盗賊の処罰…盗賊を生きのまま秤にかけて計り、弦で絞め殺し、その後で秤で計る。生きているときはより軽く、よりやわらかく、動きやすいが、死ぬとより重く、より固く、動かなくなる。

K… 鉄球を赤く熱したものと、冷たく冷えたものとを計ると、より軽く、よりやわらかく、より動きやすいのは、熱され、風を送られ、燃え、輝いているときの方である。

この身体は、寿命と熱と識を伴っているとき、より軽く、よりやわらかく、より動きやすくなる。寿命と熱と識を伴っていないときは、より重く、より固く、より動かなくなる。

〈問答七〉ジューヴァの存在証明（三）

P… 盗賊の処罰…盗賊を、皮膚や肉などを傷つけることなく、殺し、ジューヴァが出て行くのを観察する。死ぬ間に、男を仰向けにして、ジューヴァが出て行くのを観察しても、見えない。うつぶせにして……、脇を下にして……、立たせて……、逆さにして……、手で打ち……、土塊で打ち……、棒で打ち……、刀で打ち……、あちこちに動かし

て観察するも、見えない。

K… 法螺貝は、仰向けにしても、うつぶせにしても、（以下同右）妙なる音を出さない。法螺貝は人と努力と風を伴わないと、音を出さない。

同様に、身体も、寿命と熱と識を伴うとき、行住坐臥ができ、六根は働く。

〈問答八〉ジークアの存在証明（四）

P… 盗賊の処罰…皮膚を切つてジークアが出て行くのを観察しても、見えない。同様に肉、骨、骨髓などを切つてもジークアが出て行くのは見えない。

K… 火の起こし方を知らない子供の例え。火は火起器を斧で割つても出てこない。

あなたはこの子供のように蒙昧で、的はずれの仕方、あの世を探している。悪見を捨てなさい。長夜に不利や苦しみがないように。

〈問答九〉バーヤシの頑迷

P… なんといわれようと捨てるつもりはない。わたしが「あの世は存在しない。生まれ変わる生き物は存在しない。善悪業の果報はない」という見解の持ち主であることは、バセーナディ他すべての王たちの知るところだ。捨てると非難する者たちがいるだろう。何としても捨てることはしない。

K… 最初の荷物に固執して、商機を逸した商人の例え二題。悪い目が出る賭博師。

〈問答十〉省略

〈帰依と布施〉

パーヤーンは帰依し、人々に供養をする。しかしその布施は、屑米の食であり、粗末な衣服であった。その布施に従事していたウッタラという青年バラモンは布施した後、「この布施によりパーヤーンとこの世で一緒になったが、あの世ではそれはない」と予言する。ウッタラはパーヤーンの布施を自分では「足でも触れようとは思わないもの」と批判し、自らは王に対し望み通りの布施を行う。

パーヤーンは、誰も喜ばぬ布施をしたために、死後、四大天王の眷属として、空つぼのセーリーサカ宮殿に生まれた。ウッタラは、立派な布施をしたことで、三十三天の眷属として天界に生まれた。

〈結末〉

尊者ガヴァンパティは、昼を過ごしに天のセーリーサカ宮殿に行くと、パーヤーン天子が尋ねてきて、ことの顛末を話し、人間界に戻ったら、非難されない布施をするように、パーヤーンとウッタラの布施の事実を伝えるようにと頼む。ガヴァンパティは人間界に戻り、その通り伝える。かくして、皮肉なことに、パーヤーンは、自ら、あの世があること、生まれ変わる生き物がいること、善悪業の果報があることの間接的な証言者となるのである。みごとに起承転結である。

おわりに

以上の二つの異なる対論の伝承を詳しく吟味する余裕はないので、二、三の問題を指摘をして、後は別稿を期したい。一つは、靈魂という語に最も近いジークヴァという術語の使用である。この語は無数の靈魂の实在を説くジャイナ教にとっては、全く違和感はないのであるが、仏典では使用は限られる。この場合はあくまでもパーヤーン王の言葉

にしか見られない。カッサパ比丘は否定する外にはその使用を慎重に避け、伝統的な「寿命と熟と識」で答えている。第二に、仏教ほどに問題点が鮮明ではないにしても、ジャイナ教も、死後の世界、業、生まれ変わる主体（靈魂）の三つを主題としていることは明らかに見て取れる。第三に、王に代表される唯物論者が靈魂の非存在を実験的な方法で証明しようとしている事である。飛躍を承知の上で言うのであるが、実験で証明する方法が目に見えない存在／世界の否定に向かう事は今日でもまかり通っているのは否めない事実である。我々が目に見えないものをいかにして認めさせるかは、巧みな比喻にかかっているというのが、二つの伝承の教訓である。

注 記

- (1) 荒牧典俊「Suttanipāta Atthakavagga にみられる論争批判について」『中川善教先生頌徳記念論集 仏教と文化』高野山大学仏教学研究室編昭和五八年、一二三―六ページ参照
- (2) 谷川泰教「Tisbhāsiyāṇi とジャイナ教思想」『ジャイナ教研究』六、二〇〇、一二―三ページ参照
- (3) 室寺義仁「Bheda にいつつの仏教教義解釈」『印仏研究』四三ノ二、一九九五、九一二ページ参照
- (4) Willem Bollée, The Story of Paesi (Pāsi-kahāyanaṃ): Soul and Body in Ancient India. A Dialogue on Materialism: Text, Translation, Notes and Glossary. Wiesbaden 2002.
- (5) 最近二つの和訳が出版された。片山一良訳『原始仏教』11 一九九九年所収、中山仏書林・渡辺研二訳『原始仏典』第二巻「長部経典Ⅱ」所収、春秋社二〇〇三年
- (6) 靈魂と身体との異同を含む論争点については、茨田通俊「無記説と外教思想」『仏教学セミナー』五七、一九九三を参照。

